

朝日 歌壇 俳壇



〈アオモシIV〉 日高理恵子

高野公彦選

自らを「死神」と言いしオープンハイマーはヒ
ロシマ、ナガサキ助わざりき
(秩父市) 畠山 時子
二階建てで宿舎次々できあがり三日月が馬毛島
を見下ろしてゐる (西之表市) 島田 紘一
散歩する犬あり今朝もヘソ天を見せてアヒー
ルする平和主義 (横浜市) 島巡 陽一
来た時の服が帰りはゆるくなるパレエタンサ
ーの全力の日々 (東京都) 上田 結香
晴天の日よりもむしろいきいきと雪の降る日
の少年サッカー (川崎市) 小暮 里紗
父と子はいつまで父と子しやばん玉つきつき
空へ飛ばすまひるま (舞鶴市) 秋山よし子
お目当てを追ったらみんな逃げられた金魚す
くいに人生学ぶ (大和郡山市) 四方 護
夫逝きて十一年目の食器棚湯呑みは今も定位置
にあり (松山市) 矢野 絹代
過去最高気温二月の十八度急ぎ北へと飛び立
つ白鳥 (五所川原市) 戸沢大二郎
また詐欺の電話か非通知着信のこのころ多き
四温の夕暮れ (豊中市) 夏秋 淳子

【評】一首目、原爆製造を指導したこの物理学者は、来日しても被爆地には行かなかった。やはり後ろめたかったのだらう。二首目、鹿児島県の馬毛島に軍事基地建設が進んでいるのを憂える歌。三首目、ヘソ天は仰向きに寝た無防備な姿。

永田和宏選

考えてみれば恐ろしい日々食す料理の名前が
「目玉焼き」とは (五所川原市) 戸沢大二郎
眼にだつて「頭」と「尻」がありまして差別
なき世の道は険しい (香川県) 藤井 哲夫
電車から零れた客と乗る客を押し込んでいた
学生時代 (長崎市) 下道 信雄
もみ殻に売られたりしあ頃の卵は確かな
重さもちいさ (観音寺市) 篠原 俊則
食べ物も武器もないから市民らは兵士に向か
い歌いはじめる (横浜市) 菅谷 彩香
耳カッターされた猫はさくら猫地域猫とふ名
で呼ばれる (茨木市) 瀬川 幸子
二度寝して春の季節だとおもつた猫がこは
んの催促にぐる (松阪市) こやまはつみ
携帯もカードも免許ももちません私は不自由
とっても自由 (多摩市) 和田 幸子
谷戸の田の畦を盛り付け塗つてゆく祖父のご
とくに父のごとくに (匝瑳市) 椎名 昭雄
独り言だと妻は言ふけど我が前で言へば小言
に聞こえてしまふ (三鷹市) 宮野隆一郎

【評】戸沢さん、気づかずに食べていたけど、確かに「目玉焼き」ってとても怖い、藤井さんの目頭、目尻も言われてみればなるほど。こういう発見も大切。三、四首目は昭和レトロを。下道さんは電車のホームでアルバイトをしていたと。

馬場あき子選

心澄み綺麗な瞳の人だつた長尾幹也といふそ
のひとは (箕面市) 大野美恵子
遺体さえ所在不明のナワリヌイ氏へ途切れさ
る無言の花束 (寝屋川市) 今西 富幸
移る世に良いのだろうかスマホへと改名せず
に「谷川電話」 (香取市) 嶋田 武夫
六人にひとり貧困食事も事欠く国の裏金
政治 (高崎市) 野口 啓子
無事だつた船四隻で水揚げす甚大被害の船島
漁港 (石川県) 瀧上 裕幸
海温に獲れる魚の変わりきて名産となる磐城
イセエビ (仙台市) 沼沢 修
能登恋し羽咋の浜の潮風に折口父子のつつま
しき墓 (鹿嶋市) 加津牟根夫
ヒアシストになりたる級友は中学で運針上手
な男の子なりしよ (仙台市) 坂本 捷子
祖父重蔵は「ちよん」といふまでと言ひ残し豪
州で潜り真珠採つたらし (大分市) 石井 蓉子
ワンルームマンションばかり増え続け家族を
忘れた孤獨な都会 (川崎市) 新井美千代

【評】第一首は長く闘病の歌を投稿しつつつけた長尾幹也さんの本質を、詠み残そうとした哀悼歌。第二首は永遠の謎とともに語られるであろう死者。無言の花束に共感の心。第三首の「谷川電話」は気鋭歌人のペンネームである面白さ。

佐佐木幸綱選

のつべらぼうがずらりと並ぶ霊園の墓展示場
は相当不気味 (仙台市) 二瓶 真
女子会の主催者はわが妻にして四足のくつ並
ぶ玄関 (東京都) 庭野 治男
港より眺むる月削の大橋ははるかな白き石鐘
磬 (松山市) 宇和上 正
瓦礫の中でパンを分け合う兄弟の笑顔をみつ
むガザの青空 (津市) 玉村 典久
いつになく清らなりけり濃き霧に視界のきか
ぬ朝の通勤 (大分市) 野田 孝夫
生徒らはヘルマン・ヘッセ知らぬなり国語教
師は戸惑い示す (東京都) 尾張 英治
おだやかなボクサー大山がラッシュして終わ
つて元の大山にもどる (生駒市) 辻岡 英雄
僅かなる窓の隙間に見し月を決して忘れじ閉
鎖病棟 (東京都) 倉田真由美
鬚鬚くちびあげあひげはおひげの中東の男
子は戒律守る (市川市) 北川 利明
アレクサとコンピを組んで初孫は、きらきら
星を踊って見せる (さいたま市) 秋間由美子

【評】第一首、珍しい題材を発見した取材力に注目。なるほど、何も彫っていない墓石を見ることは少ない。第二首、わが家で女子会開催のため、手持ち無沙汰な夫の一首。第三首、月削大橋は、愛媛県の月削島と佐島のあいだにかかっている。

短歌時評 戦争の歌を読む時は

黒木三千代が三十年ぶりの歌集『草の譜』を刊行した。
ストーリーのやうなロシアの遣り口のいやだつて言ふのに、放してほしいのに
社会的な事柄をフェミニズムの思想に支えられた比喩や寓意によって捉える手法は、一九九四年刊行の前歌集『クウェート』から引き継がれているものだ。侵攻はレイプに似つつ八月の酒谷越えてきし砂にまみれる

『クウェート』収載の代表歌。発表当時は「女性がレイプという言葉を扱うなんて」という批判も出たらしいが、この歌が訴えることの重要性が今こそ共有されるべきだろう。一九九〇年のイラクによるクウェート侵攻が領土(身体)への暴力のみならず、国家の歴史や矜持(精神)への暴力であることを詠う。「涸谷」は乾燥地帯において降雨時のみ水の流れる谷。「越えて」「まみれる」の動詞にも昏い肉体が見えてくる。

歌集巻末には高野公彦が解説を寄せているのだが、「侵攻は」について別の新しい読みを加えて提示している。
〈地図を見るのと、ペルシア湾のいちばん奥に小さなクウェートの国がある。あたかも脚を上げた女性の、その陰部のやうにも見えるクウェート。「レイプ」と言つたのは、さうした地図的連想からではないだろうか〉
戦争の歌を読む時、私たちは戦地の惨状に心を痛め、感情先行の読みをしてしまいがちだ。けれど、そうした歌こそ同情に流されるばかりでなく、慎重かつ冷静な多角的解釈が必要だろう。(歌人)

記者サロン「木下龍也さん×AI短歌 あなたののために詠む短歌」歌人の木下龍也さんと木下さんの歌集を学習したAIが参加者から募るお題をもとに歌を詠み、創作について語るイベントを4月26日午後7時から朝日新聞東京本社で開きます。会場参加とお題の締め切りは4日。定員150人。5月3日からオンラインでも視聴可能。申し込みはQRコードから。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 請海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。